雑記帳

少雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雑記帳

【Ｎコード】
Ｎ６７９５Ｊ

【作者名】
少雨

【あらすじ】
すばらしきかなこの世界　作者：蝉時雨さん
の作品を読んで思いついてパクッテ書いてしまった物
続きを書く予定未定
というううか流石に不味い気が一杯するけど、ここまで書いたのをそのまま眠らすのも勿体無いかなと思って投稿　　そして短

編集と化している最近です。

蝉時雨サンゴメンナサイ（不味いだろという突っ込みが在り次第消します

不運な騎士（前書き）

更新予定なし

だがストーリーはある

不運な騎士

「中々楽しい時間だった。ではソロソロ私はお暇するとしよう。もはや次に生きて会うことはあるまい。」

語るは黒き闇に包まれた不死（リッチー）の怪物

「そうですか。私としては何時までもゆっくりしていって欲しいのですが・・・。」

答えるのは白の神官服を纏う老女。肩に描かれている文様は、唯一神教である聖エスト教の最高神官を表す『赤い羽根と祈りの乙女』

それは明らかにおかしな光景。何せ悪を払い世界を見守る事を義務とする聖エストの神官それも最高神官と人の命を食い漁る人の道を踏み外した悪の最高位とも言えるリッチーが楽しげに談笑しているのであるのだから。

「まぁそうしたいのは山々なのだが魔術の制御にも限度と言うものがあるんでね。第一君が私をこの部屋に案内した時の周りの顔を思い出して見るべきだな。」

怪物は楽しげに笑いながら続ける

「これ以上のんびりすると君の横に立っていた太った神官が『悪に落ちた最高神官ごと殺せ』とか騒ぎ出しそうじゃないか？」

実際その頃、王の御前でその太った神官当人が悪を討てと王に唾を撒き散らしながら叫び詰め寄っていたのは御愛嬌だろう。

「ふふふ。ありありとその光景がイメージ出来ますね。」

老女はその姿を思い浮かべてコロコロと笑う。怪物は若き頃の彼女の姿とその姿を重ねて粗相を崩す。

「年をとっても貴方は変わらないな。昔と変わらず綺麗なままだ」

老女はその言葉にクスリと笑い答える。

「あらあらこんな年の既婚の老人を口説くなんて随分と女誑しだったのね？知らなかったわ皆に報告しなくっちゃ」

お茶目に片目を瞑りながら老女はからかい怪物は苦笑いする。

「さてそれじゃ送ってくれるかい？ああついでに、頼みなんだがコイツはどこか適当な店にでも売り飛ばしてくれ」

怪物は右手でずっと持って居た一振りの片刃のショートソードを叩きながらいう。

「倉庫でずっと腐っているよりかは誰かに使われていた方がマシだしな」

「わかりました。王に頼み手配しておきますわ」

老女はコクリと頷きながら答える。その目には悲しみが見える。

「嫌なものですわ。いくら解っているとはいえ仲間を送るのは」

怪物は苦笑する。

「別段死ぬ訳でもないのに気にしてどうする。しかも君の仕事は悪を払う事だろうに」

そういって大きく体を開く怪物の中には最早何もない。肉を失い骨を失いただ暗い物質が蠢くだけの体そしてそれを支える意思。それだけしか持たず、それでも生き続ける怪物。老女は静かに頷き目を閉じて詩を紡ぐ

「塵は塵に灰は灰に　汝の体は既に朽ち果てた　ならば汝の魂も朽ち果てよ　永劫（エターナル）なる咎」

その言葉に合せて怪物の周りに光が舞い降りる。

「ではな」

そんな言葉と共にカランと乾いた音が響き渡る。目を開く老女の前にはもはや誰も存在しなかった。老女は静かに剣の柄を持ち上げしっかりと抱き寄せた。それは酷く悲しい微笑み。そのまま、老女は机の上に置いてあった鞘に剣を収め静かに部屋を後にした胸にしっかりと剣を抱きながら。

――

学園都市「エドワーズ」

学園都市と呼ばれるこの町は、このルーラス大陸において４番目の人口を誇る大きな町だ。

ここまでこの学園都市が大きくなったのはその名の通り「エドワーズ」と呼ばれる学園がある為であろう。「エドワーズ」それは「知の収集」と「知の共有」を唄い文句にしたこの世界唯一の学園であり有事の際にはその学園に居るもの全てがエルトナスの兵士となる軍事拠点でもある。名の由来はこの学園の設立者「エドワード＝エルトナス＝アインツベルグ」第３４代エルトナス王国国王陛下の名前に基づく。

この学園を誇るものは「エルトナスの剣」と、この学園を嫌うものは「穢れた軍隊」と２つの通り名で呼ばれる学園都市から話は始まる。

ウィル＝グレイの朝は早い。朝日が昇る前に起き、そのまま剣を持って外に出る。その後外でまずストレッチを念入りに行った後、素振り５００腕立て２００ダッシュ５０ｍ＊２０回を２セット行うのが彼の日課となっている。
日が昇り始める頃には日課を終えて軽いストレッチを行ったのち一度男子寮に帰り水を浴びて汗を流して服を着替える。その音に起き出して来たルームメイトに一声掛けてそのまま再び外に出る。
目的地は女子寮ウィルの姉キャロル＝グレイ達の部屋だ。

「起きろキロ姉！朝飯食いにいくぞー。」

いつもどおり女子寮の寮長さんに挨拶をして彼女の部屋に合鍵で入りスヤスヤと寝ている暢気な姉の布団を剥ぎ取る。何時もの事ながら全く起きる気配がない。彼女は2日ぐらい眠らなくてもピンピンしているのに1回眠ると地震が起ころうとも落雷が近くに落ちても水を掛けても自分で起きた時以外決して起きないのである。因みに全て実話である。唯一起こす方法が

「キロ姉起きたらハグしてやる」

「ハイハイ！起きた起きた。だからハグ～♪」

この弟で釣る事だけなのである。飛び起きた姉に思いっきり抱きしめられて呆れて溜息をつきながら姉のルームメイトが呆れてる苦笑しているのを視線の片隅に捕らえ苦笑を返す。

「う～んやっぱ朝一のウィルの匂いって大好きだ～。ね？ね？ウィルおねぇチャンの抱き枕にならない？」

人の胸に頭をグリグリと擦り付けながらブラコン真っ盛りのコメントをしている姉に対して弟は姉の髪を梳きながら頭を押える。「姉のブラコンを如何にか出来ないと姉に彼氏が出来ない。よし、今度から少し注意しよう」などと考えながら手が勝手に姉の髪を梳いてる辺りがウィルの方も相当なシスコンである。更にこの男、自覚がないのだから自覚のある姉より更に性質が悪い。

「ハイハイそこでいつまでも抱き合ってるシスコン＆ブラコンとっとと離れてウィルは部屋から出る。女の人の着替えの時間だよ。」

この部屋のもう一人の住人が手を叩きながら歩み寄る。彼女の名前はソフィ。右の蒼い目と左の紅い目、それに髪の毛が右半分が銀で左半分が黒という特徴的なカラフルな出で立ちが目を引くけど気配りも料理もできる可愛いい女の子で姉の親友でもある。というか彼女が色々な姉のフォローをしてくれなければ色々問題ごとが起こる事は間違いないと思う。この間の調薬実験の時だって・・・・。

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーー

「えーとこれとこれとこれと・・あとこれかな」

無言で2つの調剤を抜くソフィ

「量はこれぐらいかな？」

無言でソフィは姉の後ろで調剤を適量混ぜ合わせてくれてる。

「次にこの3つの調剤を火に掛けて」

無言で火にくべた調剤を捨てて中身を入れ替え火を消すソフィ

「次にこの調剤を水に溶かして・・・あれ色が赤くなっちゃった・・・まぁいいやえーと」

教科書を見てる間に俺が無言でビーカーを掴み窓を開けて投げ捨てて窓を閉じる。

爆音・・・・。教科書を一生懸命見てる姉は気がつかない。その間にソフィが水溶液と調剤を新しく作ってくれる。

「ああ・・なるほど。最後にこの2つの調剤を全部混ぜ合わせれば良いのか」

「あ・・ソフィちょっと水取りに行かない？」

「あー私も行く」

ソフィが連れ出してくれた間にクスリを幾つかのビーカーに入れ替

えて少しずつ混ぜ合わせる。周りのクラスメイトたちが何も言わずに無言で手伝ってくれる。混ぜ合わせると泡と煙を盛大に吹き出しながら色が変わっていく。先生が　風の流れ（ストローム）で煙を外に追い出す。反応が終わったのを確認すると全てのビーカーの中身を元に戻す。

姉がソフィと帰ってくる。

「あれ？薬が１つに？」

「ああ混ぜておいたよ」

俺が肩を竦めて答える。姉は水を置くなり俺に抱きついてくる

「優しい弟を持って姉チャン嬉しいなー」

いやいや・・・あの量を一気に混ぜ合わせようとするのがわかってたから皆で手分けしてやっただけです。心の中でツッコミを入れながら笑顔で答える俺。抱きつかれてる俺への周りからの刺すような視線が痛かったです。

俺から離れると姉は薬を持って先生の所に行き薬をみせ先生がそれを預ける。何処からともなく安堵の溜息が漏れる。ホントすいません。もう今度から彼女１人で調剤はさせませんから・・・。前ソフィが実技で怪我をして俺がソフィが怪我したのを知らずに姉が１人で調剤をした日・・・・。爆音と共に調剤室の中が炸裂し中に居た人物全てが窓から放り出された。

原因は姉が空気球を作っていたのだが、まず原材料が濃度５０倍。そこに余計に準備された触媒の風を強化する調剤。因みにこれも５０倍

そこに水を入れたせいで　水と風の属性が反応しあい　普通は人1人を吹き飛ばすぐらいの空気球が生徒全員を教室から放り出した薬になってしまったのである。因みに姉は木に引っかかり目を回していた。

それから、「キロに薬を作らせる時はソフィと弟を配備しろ」と調剤科の先生方で言われているそうだ・・・・・・。調合理論が間違って無いだけに先生も迂闊に注意できないらしい。

つまりだ、解りやすく姉を説明すると「天然トラブルメーカー体質」なのである。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

ソフィにシスコン疑惑を否定しながら抱きついてくる姉をソフィと2人がかりで振りほどき、キロ姉をソフィに任せて俺は先に食堂に向かう。

何故かって？姉を俺が待っていると姉が俺にハグしようと襲ってくるからだ。せめて着替え終わってから来てください。いい年なんだから・・・・・・。あの双丘の感覚が・・・イカンイカン姉で妄想するとか弟として終わってる。気を引き締めて俺（センジョウ）は食堂に向かう

食堂に到着した俺は食堂の前で待っていたルームメイトに声を掛ける。

「悪い悪い遅くなったアキラ」

「何時も通りの事だろう。貴様が悪いわけでも誰が悪いわけでもあるまい」

片目を閉じてニヒルに応える彼の名前はアキラ。本名はアキラではないらしいのだがアキラという発音にしか聞こえないのでアキラと呼んでいる。彼も「異国の発音を完璧にするのは無理だろう」といってアキラで名を書く時は通している。彼は東の果てにある大和出身で黒の髪に黒の目それに黄色い肌をしておりここルーラス大陸ではあまり見かけない風体をしている。また大和の人間は貴族の連中には「東の蛮族ども」「東の猿」「東の悪魔」などと呼ばれている。

その原因とも言えるのが１０年前の東大陸「ガイエン」の制覇であろう。１０年前突然それまで鎖国とかいう方針に従い決して他国と交流を持たなかった大和が東の大陸「ガイエン」の最大の王国であった「クルジス王国」に宣戦を布告。当初圧倒的有利と思われていた「クルジス王国」は半年を持ってその歴史に幕を閉じる事となった。そしてその他の小国は降伏の後に国の解体を受け入れるか、徹底抗戦の構えの後攻め滅ぼされる事となった。

当然国が滅べば多くの難民が産まれる。東の大陸に居た多くの王族貴族はこぞって、最も東大陸に近いこの南のルーラス大陸に向かい逃れてきた。彼ら曰く東の蛮族どもは人の身でありながら人を喰らう化け物どもであり、あの悪魔どもは次にこの南大陸に来るぞ、悪魔を滅ぼさなければ世界に平和は訪れない等々。貴族連中はその言葉を信じる者も多く一時は国内にも東大陸「ガイエン」に兵を送り蛮族を滅ぼすべきだという意見が大多数を占めたが現エルトナス国王は「軍を送るには東大陸は余にも遠く向こうもこちらに兵を送り込んでくるのは無理であろう。」と言う判断を下しエルトナス王国は東大陸への派兵を拒否する旨を発表。当時はその発言で国際的非難など国内の暴動など多数の騒ぎが起こったのだが結果を見ればそれは正解だったのであろう。何せ第１次討伐軍は途中で台風に巻き込まれ６割の船が沈み戦わずして撤退。第２次討伐軍はガイエンに到着するも上陸戦を繰り広げる７日目にやはりに台風に襲われ陸揚げの途中だった食料武器などの大半を失い、其処に嵐に紛れて忍

び寄った大和の精鋭による奇襲を受け３割が討ち死に４割が捕虜になり残りの３割がほうほうの体で逃げ帰ってくるという散々の結末を迎えたのだから。

　因みに俺がこの話に詳しいのは、その４割の捕虜の引渡し交渉会議の場所に選ばれた国がこのエルトナスだったのだからだ。大和の女王それにガジルの国王など南大陸の３国の３王に中央大陸から送られてきた外交官達、そして公平な仲裁者としてエルトナス国王。何時戦争が起こってもおかしくない空気の中この国の王都で捕虜引渡しの会議が始まった。そこで大和の女王が４割の捕虜の返還に求めたのは１つ。

「ガイエンの支配者が自分達　大和　である事を認める事」

４割の捕虜即ち８万もの兵士のの命と引き換えに要求したのは賠償金でも領土でもなく戦争を仕掛ける大儀の放棄と自分達の支配の権利であった。そしてこの後の出来事が「エルトナスの王」と呼ばれエルトナスの民ほぼ全員が知っている理由である。

　何が起こったのかといえばシンプルである。仲裁者であるはずのエルトナス国王が大爆笑の後、大和　こそが東の大陸覇者である事を認めたのである。それに蜂の巣を突いたような騒ぎになった会議を横目に女王は会議を後にし３ヶ月後８万の兵は無事エルトナスに送り届けられたのである。この話はエルトナスの民を通じて世界中に広まり今や東の大陸をクルジスの物という人間は殆ど居らず大和の女王の威光とエルトナスの国王の名声を世界中に広める結果となったのである。

その後エルトナスと大和は親密な関係をここ数年で築き上げ留学生をこのエドワーズに送る運びとなりその第一期として彼アキラが選ばれたのである。

閑話休題

まぁそんな話の流れもあり彼は随分とこのエドワーズの中で孤立していたのだがある件が切っ掛けで俺達と知り合い、結局俺のルームメイトとなったのである。性格は１７にしては正規の軍人であると共に外交官としてエルトニアに送られてきたと言うだけあり、お堅いイメージが強いが実際は鷹揚な人間と言うのが自分の評価だ。

「さてんじゃ飯を姉貴達の分も含めて取りに行きますか」

「何時どおりとはいえ、憂鬱だな。朝食とは静かに食べる物だろうに」

アキラが顔を顰めつつ応える。このやり取りもこれで3回目だ。最初は外交官特権で上に部屋を取って食べていた彼が俺達と飯を喰う為にワザワザ付き合ってくれてるのだから少し悪い気もしないでもないが俺の応えも相変わらずだ。

「学生は学生らしくだ！さあ気合入れ行くぞー」

俺は扉を開け人ごみの中に込んだ。

あの後俺達は戦場を駆け抜けて今テラスの一番左端に集合した。するのは当然ながら戦利品の確認である。

「うーん鳥のから揚げがあまり取れなかったかキロ姉の好物なのに」

「魚の甘酢揚げが多めに取れたからそれで我慢してもらうのが良いだろう。」

アキラが両手と右の肘の上に置いた3つのお皿を置きながら応える。何時も思うのだが肘の上なんてバランスの悪い所にお皿を持ったまま良く　あの戦場(おしあいへしあい)を抜けて来れるな・・・。俺の視線に気がついたのかアキラは応える。

「『豪と柔』こちらにはあまり無い概念だろうな。簡単に説明してしまえば力とは押すだけが脳ではなく時には力を引いて相手を誘導する事も必要だと言うことだ。」

俺が今一理解できずキョトンとしたのを見てアキラは言葉を続ける。

「剣で言えばバスターソードで叩き壊すだけが剣技では無くフェンシングの様にフェイントを掛けて相手の攻撃を誘う動作を行うのも剣技だろう？あの人ごみも同じだ。全員が前に前に力押しで前に出てくるのだから自分の行きたい方向の人間に前を譲って場所を入れ替え人ごみを縫う様にして抜ければいい。」

「おおつまり周り全員を刃として刃の来る方向を誘導して自分をカウンターにして体を突き出すって事か」

俺が手を打ち合わせるのを見てアキラは苦笑しながら応える

「相変わらず剣術になると理解が早いなウォーリア科から騎士科に転属した方が向いてそうだがな。」

俺は少し不貞腐れながら応えながら応える

「お前さ。それ俺が騎士科に受からなかったの知ってて言ってるだろう。」

「勿論さ。基準とセンスの問題は別だと言いたいだけさ」

肩を竦めながらやけに様になってる様子で肩を竦めるアキラを軽く睨む。

この学園の説明をすると基本的にコースは６つに分かれている。

１．剣士科戦術科　通称　騎士科

これは剣技を基本に教えるコースで一番人気が高いコースでもある。理由として一番大きいのはこの学園を卒業した後、王国騎士団に入団を希望する場合剣士科を出る事が一番近いからである。なぜならやはりこの時代戦争が行われると全員が同じ武器を扱える事が補給上重要でありエルトナスもそれに逆らわず騎士団は剣と盾の練度で合否の判別が行われるのが大きな理由であり又、歴代の剣士科の卒業生が騎士団を占めているのも大きな理由だ。また、礼節の訓練も含んでいるのが大きな特徴である。

２ウォーリア科

こちらは多様な技術即ち剣、斧、槍、ナックル、弓などと言った多様な武器の扱いを訓練するのが主眼としている。こちらは傭兵などとして名を馳せる者や冒険者として名を馳せるものが多くそういった卒業生達が特別講師を行う事もあり、より実践的な戦闘術の訓練の比重が高い。余談としてアキラは刀の特別講師としての役割を担って居る為、偶に教壇で教鞭をとってる。もっとも今年編入したば

かりアキラにいきなり教室を作るのでは無く、特別講師として技術演舞や戦術論をしているのだが

3．魔術科

名前の通り魔術師の育成の部門であり唯一魔術科のみが推薦による合格が認められている。何故なら魔術の才能は血による部分が大きく、また魔力の増大する時期は個人個人によって大きくばらつきがある為基準とする材料に乏しいのも理由である。

4．聖職科

名前の通り色々な宗教の神官などを育成するコースなのだが、上の3つと違い神術とは神への理解と信仰が神の力を引き出す要となる為、筆記や弁論が重視されると言う変則的な科である。だが全員が全員神官希望や熱烈な信徒であると言うとそうではない。聖職科の本来の名前は「医療聖職科」医療即ち人を治療する為の技術として神術を使うと言うのが、本来の目的であって神官の育成は後々主眼に置かれた話なのである。なので今の神官育成という流れに逆らい医者を目指す為に聖職科に入る学生も毎年後を絶たないそうだ。

5．シーフ科

シーフと言うと盗賊を思い浮かべる人も多いのだろうが本来の正式な名称は「軽装に寄る多様な状況に対処する為の技術科」という何ともお堅く長ったらしい科なので通称でシーフ科と呼ばれているのである。内容としては、戦士科とあまり変わらないのだがシーフ科

と呼ばれるとおり鍵開けなから気配の殺し方や色んな薬の合成（例えば毒とか毒とか毒とか解毒薬とか）つまり、結局アサシンやら盗賊になるような技術を教えているのである。（一応学科としては今までアサシンや盗賊になった不名誉な学生は居ないと言って居るが何処までホントなのだか・・・。

6．レンジャー科

こちらとシーフ科が名前的には被っているように感じる人も多いだろうが内容は全く別物。こちらも本来の名前は「自然の力を利用する為の技術科」という名である。内容は精霊魔術と密林に置けるサバイバル技術に主眼を置いている為基本的にエルフの先生が多くエルフの戦士をレンジャーと呼ぶためレンジャー科という名が付いたのである。余談だと生徒もエルフが大半を占めてるので美男美女の多いレンジャー科はアイドル的な面も多くそれ目当てにレンジャ科に入学を希望する学生も後を絶たないとか・・。

まぁそんなわけで俺も剣士科希望だったのだが、俺は剣技の力量不足で剣士科ではなく戦士科に回ったのである。ちなみにキロ姉は主席で剣士科に入ったのにウィルが居なきゃやだと駄々を捏ねて説得に大いに困り果てたのは去年で一番大変な出来事だったかもしれない。

いやそれだったら「海だ！山だ！夏休みだ！」の方が酷かったか・・・あーそれよりも連続爆発事件のほうが・・・そう考えるとストーカー事件の方が精神的にやばかｒｙ・・・・・・・・・アハハよく俺去年１年五体無事で生きてるな・・・。

「ウィルーおまたせー」

俺が黄昏ていると小走りで姉が入り口からこっちに走って来た。ソフィも勿論一緒だが彼女はゆっくり歩いてくる。ああキロ姉こんな所で走らないで転びそうだから、そして其処で姉を見てニヤニヤにやけてる下級生ちょっと放課後体育館の裏にコイや！アン？きっちりガン飛ばして慌て他所を見る下級生どもを尻目に姉は近づいてくる。近づいて近づい・・・何故か凄くやな予感がするんだが？まるで姉が俺に向かって飛び込んで来るような嫌な予感がひしひしとするんだ。俺が顔を左に向けるとアキラが全員の朝ご飯を隣のテーブに移し終え俺に背を向けている。「流石エリート潔さが半端じゃ無い。」思わず少し感動して貴重な対処する時間を俺は失ってしまった。起こった事実は単純、今回は偶々地面にバナナの皮が向こう側見えない位置に落ちてたそれだけ。そして姉はきっちりそれを踏みバランスを崩す。がこんな天然な姉でも剣士科の主席であり転ぶのを倒立の要領で体を一回転させることで回避する。問題はその姉の体が慣性に倣って真っ直ぐ俺に突っ込んでくると言う事だった。「ああ朝から今日はハードだな。」俺が意識を失う最後に思ったのはそんな事だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー

ヤレヤレ相変わらずな一日の始まりだ。姉の天然体質云々よりも十自分の不幸体質で自分に対する被害が相乗していると言う事実を気にしてからにするべきだと思いながら「ウィル死んじゃ駄目ー」と頭をガンガンと地面に打ち付けて止めを刺している天然娘と慌ててそれを止めようとしている大騒ぎを眺める。今日もエルトナは平和である。

不運な騎士（後書き）

んーついでに

これの更新してる最中に小説のネタ思いついたのだが　さっきになって忘れたｏｒｚ

面白そうなネタだったことだけ覚えてるのが後味の悪さを感じさせる

異端の魔術師１（前書き）

・・・・主人公複数の予定にｗ

ストーリー自体は３つの側面から同じ物を見ると言う形になりそうなった理由・・・。いやねサブキャラ設定しすぎて主人公になるぐらいの物が準備できちゃったんだもん・・・・。

めんどくせぇ

目の前の女はまだ必死に懇願してる

一遍死ねという言葉は喉の奥で飲み込んでおく。何せ回り中敵ばかりだ。火系中級個人技（フレイムランス）の術式を準備してる奴やら剣の鞘口を切ってる奴やら「あんな可愛い子の言う事を聞かないなんて男の屑だ」とか「ミリィちゃんの為なら死ねるだろＪＫ」とか囁いてるやつら。

一遍死んで来いファンクラブ　お前さんみたいな筋肉モリモリの濃い顔した人間がＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵとか、君の為なら死ねるとか叫ぶな！横断幕作るな！しかもご丁寧に本人に見えないように高レベルの識別阻害魔法なんてかけてやがる

てめぇ魔法の術式こっちに向けるな。殺気飛ばすな殺すぞ？アン？

だが残念ながらこんなくだらない話でこの人数と喧嘩して死ぬ気はない。

面倒だうぜぇ死ね心の中で暴言を吐き倒しながら俺はそいつに応える

「無理。無駄。嫌だ。他を当たれ。」

「そこをどうにかして欲しいから頭を下げてるんです」

いや無理な物は無理だって。学園屈指のＰＴ「カプリコーン」のメンバーに魔術科の落ちこぼれがくっついていった

なんて噂が立った日には俺の周りはどうなることやら。どうせあのクソどもはオコボレに預かる薄汚い犬とかいつもと大して

代わり映えしない騒ぎを起こすんだろうな。めんどくせぇ

「カプリコーンのいくＬＶの所に俺みたいな魔術科の落ちこぼれが着いていけるわけが無いだろうが」

頭たりてんのかという暴言は飲み込む。叫べば問答無用で開戦だ。

「だからそれも問題なくて今回はｌｖを下げて火の山なんですってば家のＰＴメンバーなら魔法撃ってもらう必要も無いんですってば！」

目の前のカプリコーンのリーダー「ミリィ＝アッシュ」は頭を下げる。美少女、有能、優しい、お嬢様とくれば

学園の誰もが放っておかないアイドルの筆頭だ。そして熱狂と狂気は紙一重だ。

一遍と言わず地獄巡礼して来い！！！

言葉は相変わらず頭の中を駆け巡る。がやはり食堂中に居るファン２００対１じゃ勝ち目は無い。

「なら魔術師を連れて行く意味が無いだろうが！」

俺がこれで４回目の回答を繰り返す。４回言っても納得しないとか何処が有能だよ

「だから魔術師が居ないと中級以上のダンジョンの探索許可が下りないんですってば！」

これもやはり４回目の回答を同じ答えを繰り返すとかてめぇはオウムか鳥頭め！

「なら初級のダンジョンに行け。人を巻き込むな！！」

「目の前にフリーの魔術科生徒がいるのに初級にいく必要がありません。しかも初級では課題が終わりません！！」

俺が睨むと負けじと睨み返してくる。うぜぇ

「てめぇの都合に人を巻き込むな」

「なんであなたもこんな好条件で頷いてくれないんですか。探索費用は全て此方持ちで尚且つ夏休みの課題は優が着く。その上魔術を使う必要も、日数も僅か５日。しかも報酬は全体報酬の３割前金で払うんですよ！」

ついでに今回は前金になったか。が大筋はかわらねぇな。くだらねぇ

「無理。無駄。嫌だ。他を当たれ。」

「そこをどうにかして欲しいから頭を下げてるんです」

いや無理な物は無理だって。学園屈指のＰＴ「カプリコーン」のメ

ンバーに魔術科の落ちこぼれがくっついていったって

実に5回目のループに巻き込まれて始めた時後ろからミリィの後ろからオズオズと一人の魔術師が声を掛ける。

「ミリィちゃんこれだけその人が嫌だって言ってるんだから止めようよ。やっぱり私が着いて行くから大丈夫だよ」

「駄目！ユフィあなたは宮廷魔道師からお声が掛かったのにそれを蹴ったらどうなるかわかってるでしょう！」

ナルホド。コイツがユフィ＝エルナスか・・・。魔術科の麒麟児。夏休みに宮廷に見習いとして上がるという噂は本当だったのか・・・。

ムカつく本当は俺もその場所に居るはずだったのにムカつくムカつくムカつく

宮廷上がってお手つきにでもされてそのまま惨たらしく殺されろ

俺が簡単な呪いを手早く送るとパチンという音が辺りに響く。クソガ。常時障壁魔術展開してやがる。目の前の魔術師はまるで

気にした様子が無い所を見ると日常茶飯事なのか。うぜぇー地獄に落ちろ

「だから彼女の為に折れてください。」

「魔術師が魔術師為に損をしてまで得をする行為を見逃せと？は！死んでもごめんだね」

俺が平然と胸を張って応えるとミリィは呆然とした表情でこっちを見ている。

アホですかこのお嬢さん？まるで魔術師というものを全く理解してないでいやがる。魔術師って職業はようは独占業だ。

自分だけが得するように他人を騙し技術を盗み自分だけの知識のみを高める。相手が自分より優れて居るのなら

ＫＩＬＬ　ＯＦ　ＴＨＥＭ（ブッコロセ）

死人に口なし

生き残った人間こそが勝者なのだから。そんな過酷な生存競争の中で見知らぬ他人を助けろ？しかも自分より優れている？

死ねば良いのに～♪

「貴方それでも男ですか！」

面前のガキが爆発する。当然だろ。

「性別の前に魔術師だ！！なんか文句あるか！」

目の前で怒りを露にするガキンチョとおろおろするフードの女　判りやすく一言「超絶うぜぇー」

「あーなるほど不能か」

一瞬空気が死んだ。俺はそう感じ、視線をガキの後ろに立っていた

エルフに向ける。ああ今なら人を殺す邪瞳でも使えそうだ。
その睨みつけただけで殺せそうな視線をうけてそのエルフ女は繰り返す

「あーすまん訂正だ。受け専門なんだな？それは失礼した。お詫びに今度良い男を紹介しよう」

俺の中で何かが切れる。死ねばいいのに

「ふ・・・ふ・・・ふ・ふざけんなー！！！！！！！」

俺が吼えた瞬間後頭部に強い衝撃を受けて俺は意識を吹っ飛ばした。
シーフ科の人間に背後取らせるとかこいつら皆死ねばいいのに

意識を飛ばした俺は数分すると意識を取り戻した。場所は保健室
この場所のアルコールの香りはあの場所を思い出す。

くそが！今日は厄日だ。ズキリと痛む頭を押えて俺は起き上がる。
こんな場所に一分一秒でも居たくない。

「後頭部に強い衝撃による失神、なんだ階段ででも転んだの？」

起き上がりベットから出てきた俺に椅子から声を掛けてのは保健室の主だ。無言で靴を履く俺に声は尚言い募る

「くすくすくす情けないわね。日頃の鍛錬不足じゃないのか？それともあれの日かしら？なんなら相手をしてあげましょうか？」

一遍死ね。こいつの相手は一切合財するべきではない。どうせ吐かれる言葉は何時でも猛毒でしかないのだから

「それとも彼にこの件報告してみましょうか？彼またとんでもない事を言い出すと思わない？」

ああくそ。このサディストめ。俺が視線だけを其方に向けると主は優雅に足を組み替えて妖艶に笑う。
彼女はその綺麗な顔に似合わないサディスティクな笑みを浮かべて此方を眺め返す。暫くその場には沈黙が立ち込めたが
口を開いたのは俺が先だった。

「それでなんの用だ？」

「運び込まれてきたのは貴方だったはずだけど？」

俺が無言で踵を返すと彼女は笑いながら応える。

「拗ねない拗ねない。ちょっとからかっただけじゃない？それで頭の方はどう？」

「問題があると思うか？」

俺は出口に向かって歩き出す。

異端の魔術師１（後書き）

一応２番目の主人公

一応設定はプライドが高くロクデナシで現体制に不満を持つが意見を持たない

空っぽの人間（あれだ甲殻の口を閉ざしってやつあんな感じ）

戦闘能力と戦闘スタイルと言う意味では凶悪の一言に尽きる。

勿論覚醒あり　凶悪＋覚醒で神になる

次に何となくで作者閑話

注意

更新来たーとか思わないように

作者閑話（愚痴とかに近い日記？）（前書き）

何故書いたか？

そりゃ勿論・・・・家追い出されて暇だったからｗ

掃除するから外でも行って来いって追い出されてもね？ゲーセン行って対戦する気力もないしノートＰＣでオンラインゲームするのも無理だし。小説書くには眠くてやる気でないし・・・。暇つぶしの成分が１００％確定。

作者閑話（愚痴とかに近い日記？）

とりあえずこの小説未来的に更新するなら、魔術師のドタバタの経緯を書いた後バトル（ここで魔術師の変態的スタイルを出すつもりです。）その後は一旦魔術師が終わってから、ソフィの裏設定の伏線を1話入れその次についでだからアキラの名前関係のトピックで1話んでやっと3人目の主人公となるわけですが前もって一つ

時系列
入学
夏休み　魔術師
冬休み　ソフィ
2年目の春　アキラ
夏休み　騎士
冬休み

ええ。時系列何も考えて無かったのでぐちゃグチャです。まぁ前もって主人公複数と書いてあったから何となくは読んでいければ判るのですが。そこまで書けるか判らないので先もって暴露。

更に3人目の主人公

設定僅か4行・・・・伏線裏設定ナニソレオイシイノ？状態

いやね・・・。バランス上主人公を3人目書く必要が出て更に女性にする必要が微妙にあるのですが、女性の主人公って書いた事無いんで判らんのですよ。

つまり確実に書いてもここで止まる。えぇ。これ書けないと延々２万文字書いた騎士の設定とストーリーも魔術師の面白いと思って１万文字書いた設定も全部パァ・・・・何か降りてきて尚且つ暇だったら更新するかも。正直先行きが真っ暗過ぎて書くのにテンションがあがらない。

そして以下愚痴とい　うかボヤキただ暇だから徒然考えて何故か徹夜の変なテンションで書いている謎仕様

以下の駄文削除済みです家に帰って一眠りしてみたら頭痛くなった。ので削除

駄文失礼しました。

作者閑話（愚痴とかに近い日記？）（後書き）

愚痴終了これで明日からも頑張れる《何

まあここまで読んでもらってすみません

徹夜で変なテンションになってるので可愛そうな子を見る視線で生暖かくお願いします。

異端の魔術師２（前書き）

取り合えず書いたというレベルの代物です。

異端の魔術師2

「また厄介ごとに巻き込まれる見たいね？気をつけなさい、前回のような幸運と必然は次には無いわよ。」

ああ判ってるよ。姉貴

姉貴が死にそうでもなきゃあんな無謀な真似しないっての

そんな言葉を飲み込み俺は無言で手を振り部屋を出て行った。

さて今日は何処に逃げるか。

図書館の中にまで最近は包囲網を広げてきたからな何処か盲点のような落ち着いて隠れられる場所は無いものか・・・。

「おやおやそんなに急いで何処に行くんだい？落ちこぼれ君」

後ろから聞こえる性根の捻じ曲がった声、うわぁメンドクサイ奴が来た。今日の運勢は絶対に最悪だ。

「おいおい。お優しい次期公爵様がワザワザてめぇの様な出来損ないにお声をかけて差し上げているのに

だんまりかい？落ちこぼれの三流魔術師君？」

ギャハハと周りの取巻きが下品な笑い声を立てる。ああお前らの方が余程低俗な三流貴族だろうが！

というツッコミは心の中でしまって置く。この場所での殺し合いなんてのは真っ平ゴメンだ。

「おいおい。何とかいえよ？落ちこぼれ？」

「そういえばこいつなんか、カプリコーンに取り入ってるって噂だぜ？」

「ヒャハハハ！落ちこぼれ君は必死だなー。どうせどん底の成績を少しでもどうにかしようと必死なんだぜ！」

また、ギャハハという下品な笑い声が響き渡る。ちっこのクソ程面倒な時に大声をたてるんじゃねぇ！

「見つけた！」

正面から４人組が此方を指差して叫び声を上げる。見つかった！俺は即座に窓への転進と窓を開けて飛び降りる為の加重制御の呪文を唱える。が、それは窓を開けた瞬間目の前の木の上で此方に笑みを浮かべるエルフによって阻止される。駆け寄ってくる前からの４人と後ろにはアホ貴族ども外には薄らボケのＢＬエルフ・・・・死ねばいいのに。前後左が駄目なら上下の壁をぶち抜いて逃げるか？いや身軽なエルフが外に居る事を考えると困難か。内側は流石にやりたくねぇな。教授方がトンデモナイ勢いで飛んで来て情け容赦無くボコボコにされるのはねぇ？仕方がないか機を待つか。俺は諦めて両手を開いて手を上げる。

「降参だ好きにしろ。」

「それじゃあ加減無く」

後ろから聞こえた声に咄嗟に前に転がるようにしてその一撃を避ける。正に問答無用かよ。

驚いたような表情で此方を見ているシーフ科の生徒を尻目に俺は術式を紡ぐ。

「集え集え水の息吹は在り手を隠し在り方を歪む《幻想の水辺》」

どちらにしても必殺を交されたのを見て硬直したこのタイミングが勝機。因みに俺の初期属性は火だ。

だから水は苦手であると言うのは一般的な常識だが俺は風や土と大差なく水を扱える。これでも努力家なんでね？

そして俺が得意とする技術は高速詠唱と詠唱破棄。即ち十数秒掛かる詠唱を数秒で詠唱する。

詠唱を見て慌てて距離を詰めてくるが・・遅い。大気中の水分を集め光を歪めて幻影を生み出し自分の姿を隠す。

そして色んな方向に駆け出す俺を見て混乱すしている連中の横を駆けぬける。その途中ＢＬエルフとばっちり目が合った。

そいつは俺の目を見てニヤリと笑いやがった。ムカつくなーホントええそうですよ。幻影ですから足音どうせ消してませんよ。エルフさんしかもレンジャーの耳にはよく響きますでしょうにさらにこういう幻影魔法なんかはレンジャーの専売特許でどうせ俺ら魔術師が使うのは下手ですよ！

エルフなんて死ねばいいのに

俺は取り敢えず全力疾走する。エルフ1人で追ってきてくれるなら

折を見て迎撃すればいい。解呪して全員で追って来るなら一歩でも遠くに逃げるべき。

そう思って油断してた時期が俺にも有りました。

「水が紡ぎて川になり
水が纏いて湖になる
我願うは川の如き流れ
我願うは湖の如き圧倒

気がついたときには既に手遅れで、対抗呪文も対抗方策も実行するには時間が致命的に足りなかった。

押し流せ《水の流れる場所》」

濁流は通路に溢れそして走るより速い速度であっさり俺に追いつき俺をあっさり飲み込んだ。

・・・・・絶対制服泥まみれだな・・・クリーニング代も安くない・・・学園で普通に中級魔法ぶっ放すとか

そんな馬鹿死ねばいいのに

そんな思考と共に俺は壁に叩きつけられ気を失った。

目を覚ますと知らない馬車の天井があった。

目を覚ますときに言う定番と言えば定番だがやられた方は最悪だ。
起き上がり取り合えず自分の横で舟を漕いでる神官っぽい服を着た餓鬼を全力で長椅子から蹴り落とす。

「ギャ」

悲鳴を上げて叩き着けられた馬鹿の背中を踏みつける。勿論グリグリ捻る様に肺の後ろを踏むのは基本だ。
足元からウギャやらグギャとか蛙が潰れたような音がするのは気のせいだ。

「燃え上がれ《火の玉》」

手の平の上に出来た下級範囲魔法（ファイヤーボール）を馬車の御者台に向けてぶっ放す。

先手必勝
見敵必殺
問答無用

そんな思考の元放たれた魔法は着弾する前に御者台の方から放たれた水を纏った矢にぶち当たり消滅する。

「随分な寝起きの挨拶じゃないか？」

そんな言葉と共に御者台の方から近寄ってくるのはＢＬエルフ。気配的に御者台に残り２人屋根の上に１人と足元に１人
気配的に魔術が使えるのはミリィとこのＢＬのみだが流石に奇襲が失敗した以上勝機は薄い。
抵抗すれば屋根の上からシーフが正面からエルフの魔法が襲って来る。流石に俺でも同時に２人しかも相性の

悪い兵種はキツイな、どんなに無茶しても・・・良くて自爆気味に
３人巻き添えに相打ちがやっとか

「いえいえ。お気になさらずに人を誘拐するような不届き者には丁重な挨拶をというのは我が家の家訓ですので。」

笑顔で人を誘拐という部分にアクセントを置いて応える。エルフの目が少し据わるの尻目に機嫌を良くした俺は言葉を紡ぐ

「無駄話はさて置き、当然ながら次に付く町で自分をギルドに降ろして頂けるとありがたいのだが？」

言葉尻に「無駄話するつもりは無い。次に付く町でこのパーティ抜ける。文句があるなら誘拐で騒ぐぞと？」
含みを込めてお話する。その言葉にＢＬはニヤリと笑いやがった。
眉を顰める俺に対してＢＬは爆弾を炸裂させやがった。

「安心したまえ次に着く町は・・・・この「火の山」を降りた先だ。」

御者台の薄い布を持ち上げてその向こうに見える真紅に染まった山を見せながらＢＬは笑う。
チッ。完全にしてやられたって訳か、俺は下がった溜飲を下げるために
足元に追加で一捻りを加えて「グゲ」とかいう鳴き声を上げさせて俺の鬱憤を発散する。
そうして俺の陰鬱な糞暑い夏休みの「火の山」登山が始まった。

熱い。
山に入ってから何度目か判らない言葉が口の中で言葉にならず消えた。陣形は前衛が私を中心に前に3人後ろに3人
それぞれ前後でマンツーマンの相手が決まっており緊急時には散広するというもの。私の今回の相方は
ユフィの替わりに誘った魔術師。成績は非常に悪く魔術科に在籍出来ているのが不思議な低空飛行と聞いている。
つまり足手まとい。
それでも誘わなくてはならなかった。何故なら、ミリィが宮廷からお呼びが掛かったからだ。
このＰＴの中で最も高い才能を持つ彼女の名がこの国の歴史に名前が残るというのは長い間彼女の相棒兼親友としては
非常に喜ばしい事だ。だが彼女の才能は天分の才故に非常に不安定。
そして精神的に不安な部分・・・

即ち彼女は極度の心配性なのだ。

例えば彼女と相棒になってから暫くしてからモンスターに私が一人で立ち向かうのが危ないからと言って
戦士を神官をシーフをエルフをとドンドン連れてきたり、野宿に必要な装備を心配だからと言って
3日の行程に6日分準備してきたり、神官が居るのにもしもの時の為と言って何時でも
応急治療セットを何処でも持ち歩いてたり、軽装備じゃ危ないといって重層鎧持ってきたり、
残念ながら重すぎて私が持てなかった為今は戦士が着ているんだけどね？

何時も「心配だ心配だ」と言って夜中不安で飛び起きたりしているのだ。
今回も彼女も自分が抜けたらどうなるのか心配だ心配だと部屋の中をグルグル回っていた。
という親友を安心して宮廷に上がれるように彼女が居なくても大丈夫だよ。と
彼女が宮廷で万全の力を発揮出来るように精神的な不安を取り除いてやらなくてはいけなかった。
だからこそ無理やりでも魔術師を加えて火の山から素早く戻り彼女が宮廷に上がる日には戻らなくてはいけない。

彼女が決意を新たに前を向いて歩き出すのを尻目に少し補足をしよう。

サイクロップスという上位に分類される魔物に一人で突撃を慣行していく戦闘狂的な性格を持つ彼女の為に
親友と呼ばれた少女が仲間集めに奔走した事実。
迷いの森と呼ばれる森を強行軍するのに直線距離で3日分しか食料もたないで行こうとした事実。
毎度恒例無茶苦茶をする親友の為に常時彼女が胃を痛めて胃薬のついでに纏めて応急治療セットを胃の為に持ち歩くようになった事実。
古い鎧のままで何時までも防具を新調せずに武器ばかり新しくする彼女の為に鎧に興味を持たせる為に彼女が高い鎧を持ってきた事実。
彼女の無茶が夢の中にまで出てきて夜中飛び起きた事実。

親友と彼女が呼ぶ少女が彼女の為に胃を痛め心配性になっている事を彼女はしらない。
その親友が心配の余学園で魔法を面白いように暴走させて掃除どころではなくなり
教職関係者の頭を悩ませている事を知らない。
彼女が何故彼をこのptに入れようととしたのか知らない。
彼の本当の価値を知らない。

故にあの事件が起こったのは必然だが彼女はまだその事件が起こる事を知らない。唯一可能性として知っていたのは
この場に居たたった一人の魔術師だけだった。

異端の魔術師２（後書き）

気紛れ更新？行進？後進

思いつき（前書き）

思いついたので保管用です。

思いつき

「そんな攻撃がきくか！！」

飛んでくる。
実弾が雨のように、
　ミサイルが白煙を引きながら

しかしそれでもこの身には傷一つつけることは叶わない。なぜなら
俺が得意とする魔法は

「質量魔法」

いかなる魔力もいかなる攻撃も前面の静止した空気の壁の前に俺の
体まで届かない。

いかなる光も音も通さない闇の盾であり俺の剣。

しかしまぁ、ガジェット共は脳が足りないのか未だに正面からひた
すら撃ってくる

回る回る回る
稼働しているのは
静止の魔術と魔法陣
では静止したときエネルギーはどこに行く？

決まっている。

どこかに放出されるか、

ため込まれて爆発するかだ。

Ｓｈａｌｌ　Ｗｅ　Ｄａｎｃｅ？

ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ！

「カートリッジリロード！」

俺の声と共に回転していた魔法陣が止まりそして逆回転を始める。

腹くくれ！

ここから先は愉快なダンス会場だ。

１秒先が見えない素敵なダンス会場。さぁ逝こうか？集まった魔力が杖を通して魔法陣に流れ込む

「蹂躙する重戦車（チャリオット）」

質量エネルギーが溜めこまれ質量が増加する。
運動エネルギーがベクトルへと変換される。
強烈なGが体を引きずって飛んでいく。
カートリッジガ一瞬浮いて見えたと後景色と共に消える。
だが、風は起こらない。
なぜなら俺の周りには無敵の剣があるのだから。

「博士、ゆりかごが揺れています。」

「な、何があったのかね？ウーノ」

「データー出ました・・・・こ、これは・・・・・。」

「報告してくれ！」

「ははい、第1番装甲からゆりかごを挟んだ反対側まで何かが突き抜けて行きました。これは、、、、、嘘・・・・・・・体当たり？」

思いつき（後書き）

落ちなし意味なし。

リリカルでスーパー系ってあんまりいないよね？

ちょっと妄想・・・・・そんな攻撃キカンワ！！

攻撃とはこういうものをいうのだ！

「グレートホーン」

それなんてセイントセイヤ？

いやここは敢えて

「グラウンド１００周！」

「はい！先生！」

アタックＮｏ．１風とかトップを狙えとか・・・・・少女根性系にしたらおもしろいかなーとｗｗｗ

思いつき2（前書き）

「やっちゃえ！バーサーカー」

「了解した。《イエス・マイロード》」

思いつき2

彼は鎖を体中に巻きつけられ膝を着いた。

その姿に、後ろから彼のマスターの悲鳴のような叫びが聞こえる。

「ククク。王に傅くとは雑種の割には賢いではないか」

目の前に金色の鎧を身に纏った男が笑う。だが周りに浮かぶ剣軍が彼が口で言ううほどに楽観していないことを雄弁に物語っている。何よりその右手には彼の切り札たる宝具が静かに待機しているのが何よりもの証拠でもある。

彼は動かない。つい先ほどまでは後ろに立つ白い少女を守りながら彼女の敵を討つ為に突撃していたのがまるで嘘のように微動だにしない。顔は下に向けられ体から煙と共に彼の傷口が癒えて行く。

「アーチャー！」

そこにどちら側にも属さない少年の声が木霊する。

それは戦いのさなか現れた４人の男女のうちの一人が発した物だった。

１人は青い鎧を纏った戦乙女（ワルキュリア）

1人は赤い外套を纏いし騎士(ナイト)
1人は赤いコートを身に纏い強き意思を瞳に宿す少女(メイガス)

最後の少年は普通の何処にでも居そうな少年だ。でも彼はマスターにとってのナイトだ。マスターの為のマスターの為に　命を捨てる事すら厭わないそんな男だ。彼の誰何をアーチャーと呼ばれた金ピカの鎧を着た男が笑う。

「ほほう。ここまで来たか雑種」

そこには相手を馬鹿にしたような響きしかない。だが「刹那」そう、その刹那だけは金色の鎧を着た英雄は確かに油断したのである。故に彼は動く。

「それが、命取りだ英雄王(ギルガメッシュ)」

驚愕それがその場に居たすべての人に対してこの言葉が与えた物だろう。だが時はこの時も動き続ける

射殺す百頭(ナインライブス)

その宣誓はあまりにも呆気なく成功する。地に倒れる英雄王(ギルガメッシュ)
彼は勝者として語る。

「理解できぬか英雄王(ギルガメッシュ)？」

「ああ。理解できぬ。バーサーカーは狂うそれがルールだ。」

男は致命傷を受け地に倒れて尚平然として見せた。その胆力だけは正に王であろう。

「まずはじめに、私が伝説となった中に狂って子を殺し正気に返るという伝説があったのは、知っているな？故にいくら狂おうとも時間さえかければ正気に戻れる。」

彼は言葉を続ける。

「だがそれには長い歳月が必要だ。次に十二の試練(ゴッドハンド)が死因に対して耐性がつくのは知っているな？」

彼は地に倒れ伏した英雄王(ギルガメッシュ)の傍らに歩み寄り言葉を続ける。

「私がこれまで9回殺された理由はなんだ？英雄王お前の宝具に貫かれたからか？それとも今回のアーチャーに射殺されたからか？違うな。もっとも大きな死因は」

言葉と主にその斧剣は掲げられる。

「私が狂っていたからだよ。」

言葉と共に剣は振り下ろされる。飛び散った血は時を置かず光となって消えていく。

ゆっくりと大英霊は未だに茫然とこちらを見る者たちに宣誓する。

「我が名は「狂戦士(ヘラクレス)」命惜しくば背を見せるがいい！剣を向けるならば我が名に賭けて貴様らを討たん！」

この聖杯戦争に覚醒した英霊が降り立った瞬間だった。

思いつき2（後書き）

ヘラクレス正気に戻ったバージョン。

正直バーサーカーのクラスを継続しながら正気に戻ったヘラクレスとか勝ち目なくね？だってこの人も無敗の英雄だよ？ｗ

アーチャー（経験）＋才能＋十二の試練＋能力ＵＰ　　それなんてチート？

ネタ（前書き）

オンラインゲーム閉じ込め物

ネタの書きなぐりです。

過度の期待厳禁

ネタ

突然だがこの間ＰＴメンバーと一緒にＶＰの世界に閉じ込められた。
そこはＶＰヘビーユーザーの変態的思考で驚くのではなく狂喜乱舞
転生チートきたあああああああコレデカツルと叫んでいたのだが重大
な問題が発生した。

順を追って話そう。

まず装備は特級廃仕様
ＭＰとＨＰとＬＶはＡＬＬカンストの９９９
顔立ちは全員美形。

ココまでみれば恐らく何の問題も無い用に見えるのだが問題はここ
から先なのである。

ネームドキャラの平均ＬＶ１０００

英雄なんてのになるとｌｖ３０００である。

・・・・つまりわれわれは比較的普通の冒険者なのである。最強クラスの装備背負った鴨であると。
これはそんな我らの冒険譚である。

――――――――――――――――――――
―――――――――――

A「さて問題は俺TUEEEEができないということの一点なのだが解決案はあるかね」

只今4人の中でリーダーのAが率先して問題の解決を図る為に意見を求めている所である。

B「そりゃあ、魔法のLVカンストの有効活用」

Bは魔術師だ。多少派手好きなのが玉に瑕だが釣りと逃げ撃ちの腕は確かである。

C「でも、この感じだとネームドの魔術師とか特殊魔法とかもってそうじゃねぇ？」

CはMだ。完全支援のプリで野良と辻ヒーラーを延々とβからやっているのだから筋金入りである。勿論この中では最年長である。

D「美形を活用してホストをやろう！」

Dは忍者である。ジョブを見てもらえば判るとおり最大瞬間火力が売りのジョブの彼は、１ｖは低い物の特殊効果が神と言われる装備に廃課金を注ぎ込み、結果神がかった廃強化を成し遂げてしまったというとんでもない男である。
また、その結果論として彼の必殺スキルは瞬間的に普通の廃人装備と比べてトータルで１０倍のダメージが出るという廃火力である。
通常攻撃が普通の廃人の２／３というのはご愛嬌だ。

A「甘いぞ！お前達！」

Aは胸を張って答える。それをじっと見つめる３つの瞳Aは宣言する。

A「そんな小さなチートで満足か？
そんな小さな志で満足か？
否！！
我らが求めるのは女の子が選り取り
お金は尽きぬほど
欲しい物は何でも手に入る
そんなユートピア！！」

Aは手を机に叩き付け声高に叫び続ける。

A「だが我らにはチートが無い。ならばどうするか！！！！！！！」

Aは周りを見渡し声高に叫ぶ。

A「野郎ドモ

デバックモードのコードをさがせえええええええええ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6795j/

雑記帳

2011年10月6日05時29分発行